

日本語が好きだから



## 日本語リメディアル教育シリーズ

■ 日本工業大学

# 理工系だからこそ、 ユニークな文章訓練で日本語力アップ

ここ数年来、ゆとり教育を受けた世代の入学や入試の多様化などが原因で、リメディアル(学び直し)教育に力を入れる大学が増えている。不況でも就職に強い理工系大学として知られる日本工業大(埼玉県宮代町)でも、学生の学びに応じたリメディアル教育を実施、その中で学修支援センターが中心となって日本語能力の向上を目指したユニークな取り組みが行われている。



日本工業大学の本部がある宮代町は、埼玉県の東北部に位置する人口約3万4000人の東京のベッドタウンだ。同大は創立100年を超え、7学科からなる工学部だけの大学で、約5000人の学生が学んでいる。

同大の入試は、一般推薦、専門高校入試、AO入試、一般入試、センター利用入試などと多様化し、入学時に全員対象の数学、英語、国語のテストを実施している。

テストの結果は、習熟度別のクラス分けに使用し、学力情報として記録し学生の指導に活用される。

国語の場合は、市販の日本語プレースメントテストを利用する。その結果がよくなかったと判定された学生に対しては、2005年に開設された学修支援センターが行う日本語のリメディアル教育科目「文章能力開発演習」の受講を促すことになる。もちろん成績優秀者や1～4年の全学年で希望者も受講できる。

「文章能力開発演習」は、週1コマの授業で、前期後期各15コマからなる。授業担当者も作成に関わっている「大学生のための日本語再発見」という市販テキストを使い、漢字や慣用語法、文法、表記などについて学ぶが、その一方でユニークなのが文章訓練の授業だ。

A4の紙1枚を学生に渡して「カップラーメンの作りかたを小学生にも分かるように文章で表現しなさい」、紙飛行機を渡して「その作り方を文章で表現しなさい」—などのテーマの作文が出題される。

「自分で書いてみて文章のどこが相手に伝わらなかったのか学生に理解させ、必要な情報を意味の通じる形で他人に伝える力を身に付けさせるきっかけとしたい」(同センター)というのが狙いだという。

(次ページに続く)

## 受検団体取材記

また、こんなクイズめいた問題もある。  
「『樹木・木』、『咲く』、『ピンク』、『植物』という言葉を使わずに『桜』を説明しなさい」、「『甘い』『辛い』『すっぱい』『感覚』『苦い』という言葉を使わずに『味』を説明しなさい」、「『運動』『競技』『体育』『走る』『泳ぐ』『体・身体』という言葉を使わず『スポーツ』を説明しなさい」一。学生も加わって問題を作る場合もあるという。

このほか、全文ひらがなベタ打ちの文章を、漢字交じりにして句読点を打ち、段落をつけるなどして普通の文章に直す問題もある。

一見、簡単のように見えてそうではない。理工系大学だからこそ、より求められる情報整理力や論理力、創造性を高めるための格好の授業内容のように思えた。

「入試で測れる学力以外の力を育てたい」。こうした授業を受けた学生は、最初は戸惑い気味だったが、次第に文章を書くことに自信を持ち始め手応えを感じているようだ。



同大でも日本語検定を団体受検している。同講座の指導に当たるチュータの原田麻美さんや学生は受検の動機について「自分の不得手な分野を知りたいために受検したが、その弱点が分かり、改めて日ごろから言語を意識するようになった」などと話した。

(文責は 時事通信社記者 牧俊朗)

